

聖山アトスのアマルフィ人修道院

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/000000084

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



聖山アトスのアマルフィ人修道院

根津由喜夫

一 はじめに

ギリシアの北部、カルキディケ半島の突端にあたかも三本の指のように突き出した三つの半島のうち、東端のそれに、東方正教会の聖地アトスがある。

ここには、海拔二〇三三メートルのアトス山の周囲に、由緒ある大小二〇の修道院とそれらの分院、さらには修道士たちの小コミュニティが散在しており、修道院長たちで構成された評議会の下で、治安維持業務以外はギリシア政府の管轄の及ばぬ一種の治外法権地域、いわば、「修道院共和国」とも言うべき体制が敷かれていることで有名である。ここは、今日に至るまで、アトス山当局により、一般の入山者が厳しく制限され、女人禁制が貫かれるなど、正教信仰の総本山として、古くからの伝統が厳守されるひとつの聖域なのである¹⁾。

今日、アトス山には、ギリシア系の修道院に加え、ロシア、セルビア、ブルガリアなど、東欧の正教圏の修道院も存在し、さながら東方正教会の国際センターといった感がある。ところが、中世においては、こうした正教世界の修道院ばかりでなく、西ヨーロッパのベネディクトゥス修道会に属する修道院もこのアトス山に存在していたことが、当時の記録から確認できるのである。後で見ると、
「アマルフィ人の聖マリア」修道院と呼ばれるそれは、その名が示すごとく、南イタリアの海運都市アマルフィからやってきた修道士たちによって運営されていた、と想定されている²⁾。

しかし、それにしても、ベネディクトゥス会則を奉じ、ローマ・カソリック教会の一員でもあった彼らが、なぜ、遠く離れたイタリアの地から、東方正教信仰の聖地とも言ふべきアトス山に移り住み、そこに自らの修道院を建てな

ければならなかったのだろうか。

本稿は、こうした素朴な疑問を、十、十一世紀の地中海世界の国際的交流や修道院発展の歴史といった多くの論点に触れながら、説き明かしていく試みなのである。

二 海運都市アマルフィの興隆

まず初めに、議論の出発点として、修道士たちの母国であるアマルフィのことから説きおこすことにしよう。

紺碧のティレニア海に面し、切り立った断崖に張り付くように都市が形成されたアマルフィは、今日では風光明媚な高級リゾート地として世界的に有名である。我が国でも、最近の陣内秀信氏の著作でその町並みの美しさが紹介される¹⁾など、こうした点については、知名度を上げつつある、と言えるだろう。

しかし、その一方で、この都市が、中世のある時期までは、ヴェネツィア共和国に劣らぬ一大海洋国家として地中海に雄飛していたことは、我が国ではほとんど知られていないというのが実情だろう。そこで、ここでは、この都市国家の歴史を素描し、この都市と、ビザンツ、および東方世界との関係の有り様を考察しておくことにしたい。

八三九年、アマルフィは、ナポリ公国の支配を脱し、独

立国としての歩みを始める。ただし、ドウクス(公)を名乗る歴代の元首は、隣接するナポリやガエタの君主同様、名目的にはビザンツ皇帝の宗主権を承認し、コンスタンティノープルの宮廷から授けられた爵位を一貫して帯び続けることになった。その限りで、アマルフィは、ビザンツ帝国の勢力圏の周縁部に成立した半独立的な臣属国家、という性格を帯びるのであり、ヴェネツィア共和国の成立過程と共通した特徴を示している、と言えるだろう。

国土が狭隘で、そのほとんどが険しい山地に覆われたアマルフィにとつて、発展する方向は、前面に広がった海洋にしかなかった。この町の船乗りたちは果敢に海に乗り出し、当時、キリスト教世界と厳しく対立していたイスラム世界とも、活発な交易を展開している。アマルフィの商船は、ローマ教皇庁の非難も意に介さず、ムスリムの支配する北アフリカやエジプトの港に、しきりに出入りしていた、と伝えられている。

アーマンド・O・チタレルラによれば、イスラム諸国に鉄、木材、農産物などを輸出し、そこで得られた金で、コンスタンティノープル市場において高級絹織物や貴金属・象牙その他の高級工芸品を購入、それらをローマ教皇庁を初めとする西欧の聖俗の支配層に売り捌いて巨額の富を得

る、というのが、この時期のアマルフィ交易の基本的な枠組みになっていた⁸⁾。

ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルにも、十世紀半ばには、はっきりとアマルフィ人の姿が確認できる。十世紀に外交使節としてコンスタンティノープルを訪れたクレモナ司教リウトブランドは、九四四年、ビザンツの帝都において、アマルフィ人はローマ人、ガエタ人と共に無視しえない勢力になっていた、と語っている⁹⁾。

また、同じリウトブランドは、アマルフィ人の傭兵が、ヴェネツィア人と共に、皇帝ニケフォロス二世フォオカス（在位九六三〜九六九）の精鋭部隊を構成していたことも報じている¹⁰⁾。

時代が下り、一〇六〇年代に、サレルノ侯ギスルフ二世がコンスタンティノープルを訪問したおりには、アマルフィ人の有力者パンタレオーネが帝都に有した館に一行は滞在している。そして、サレルノ侯に同行していたパレストリナ司教ベルナルドウスが現地で死去すると、彼の遺骸は、同地のアマルフィ人修道院に埋葬された、と伝えられているのである¹¹⁾。

十一世紀後半の時点で、アマルフィ人は、コンスタンティノープルの金角湾沿いに彼ら自身の居留地をもち、その

敷地内に「ラテン人の聖マリア」、「聖なる救い主」の二つの修道院を所有していたことが知られている¹²⁾から、ベルナルドウス司教が葬られたのは、これらのいずれかである、と推定することができるだろう。

同じ時期には、帝都に居留するアマルフィ人が、自分たちの店舗を所有し、商業活動に従事していたことも確認できる¹³⁾。

このように、十世紀から十一世紀にかけて、アマルフィ人は、ビザンツ帝国と政治的、経済的に太いコネクションを有していたのである。

しかし、その一方で、以上の事実からだけでは、アマルフィ出身のベネディクトゥス派修道士が、アトス山に居を定める、という両者の宗教的な結び付きを十分に説明しきれてはいないようにも思われる。そこで以下では、この時期のモンテ・カッシーノ修道院と南イタリアの現地情勢を考察することで、その背景を探る作業に取り組むことしよう。

三 モンテ・カッシーノ修道院と南イタリア

ローマの南方に所在するモンテ・カッシーノ修道院は、その創建者で「西欧修道制の父」と称されるヌルシアの聖

ベネディクトゥスの令名もあり、この時期、周辺世界に多大な影響力を有していた。同修道院の所領は、当時、ビザンツの支配下にあった南イタリアのアブリア地方にも及んでおり、そうした関係から、十く十一世紀を通じて、現地のビザンツ総督や皇帝自身が、同修道院に対して、様々な特権や恩恵を授けていた¹⁵⁾。

一方、この時期、南イタリア、とりわけカラブリア地方やアブリアのオトラント周辺には、多くのギリシア系住民が暮らし、正教系の教会や修道院も数多く存在していた¹⁶⁾。そうした状況の下で、モンテ・カッシーノ修道院は、こうした南イタリアのギリシア系聖職者と、さまざまな交流を行なっている。有名なエピソードをひとつだけ紹介しよう。

カラブリア地方出身のギリシア人聖者ロツサーノのネイロスは、九八〇年から九九五年にかけて、モンテ・カッシーノ修道院長の保護と承認の下に、同修道院の分院であるヴァッセルルーチェで弟子六〇人と共に生活していた。ネイロスは、モンテ・カッシーノを訪問したおり、自作のギリシア語の聖ベネディクトゥス讃歌を披露した、という挿話も伝えられている¹⁷⁾。

また、一〇三六年には、多分に政治的な選挙であったと

はいえ、カラブリア出身のギリシア人修道士バシレイオスが、モンテ・カッシーノの大修道院長に選出されている¹⁸⁾。

さらに、十一世紀後半の大修道院長デシデリウスは、聖堂の再建のために、コンスタンティノープルからモザイク職人を招き、合わせて同地で、教会祭具を初めとする必要な調度類を調達するために手を尽くした¹⁹⁾。

このように、モンテ・カッシーノは、南イタリアのギリシア系聖職者との友好的な交流を通じて、東方正教会に対する理解を深めていたのであり、彼らの関心は、直接、コンスタンティノープルや東地中海世界へと向かう傾向があったのである。すでに十世紀末には、同修道院の修道士ベネヴェントのヨハネスが、イエルサレムからシナイ山（おそらくは聖カタリナ修道院）、さらにアトス山を歴訪した記録も残っている²⁰⁾。

このように見てゆけば、南イタリアのベネディクトゥス会士が、東地中海を旅し、アトス山に自らの修道院を創建したことも、さほど不思議なことには思われなくなるだろう。

ただし、なぜ彼らの身の落ち着け先がアトス山だったのか、については多少の説明が必要なように思われる。とい

うのも、今日でこそ、アトスは、「聖なる山」（アギオン・オロス）と一般に称され、東方正教世界最高の聖地と目されているが、十世紀にはまだ発展の途上にあり、小アジア西部にはラトロス山、オリンポス山など、アトス以上に古い伝統と格式をもった修道共同体が存在していたからである^②。イタリアからやってきた修道士たちは、なぜこうした小アジアの古い共同体ではなく、新興のアトス山に自己の居場所を見いだしたのだろうか。この問いに対する答えは、この時期のアトス山修道制発展の歴史を概観するなかで、見いだされることになるであろう。

四 聖山アトスの発展

伝承によれば、聖山アトスの起源は、イエルサレムに隠棲していた聖母マリアが、キプロスに伝道中のラザロに逢うための旅の途中に、ここに足を降ろしたことにあつた^③とか、この地における最初の修道院は、コンスタンティヌス大帝によって創建されたが、それは「背教者」ユリアヌスによって破壊されてしまった^④、といったことが語り伝えられている。

もう少し、もっともらしい伝説になると、イスラム教徒に圧迫されたパレスティナ地方の修道士がこの地に移り住

んだことが聖山の起源になったのだ、とか、八世紀の聖像論争の際、聖像破壊主義者の皇帝の弾圧を逃れた修道士たちがこの地に避難し、ここが一大聖地になる基盤を築いたのだ、とも言われている。だが、こうした伝承も、今日では、史料の裏付けを欠いた、根拠の乏しい説であるとして、一般には退けられている^⑤。

実際のところは、八世紀末頃から九世紀にかけて、近隣の地域出身の隠修士たちが、この半島部の孤絶して人の手の入っていない清浄な自然環境に魅せられて、祈りと瞑想の生活を送るために、徐々に移り住むようになった、というのが実態に近いようである^⑥。

当初、これらの隠修士たちは、各自が思い思いの場所に庵を結び、相互に交渉をもつこともなく、誰の干渉も受けずに暮らしていたものと思われる。

ところが、彼らの平穏な暮らしは、長く続くことはなかったようだ。皇帝バシレイオス一世（在位八六七～八八六）が八八三年に発給している勅書は、一切の行政当局者や私人がアトスの隠修士たちの生活を煩わさないように命じ、とりわけ、近隣の牛飼いや羊飼いが、家畜を山内に入れることを禁じる旨を申しつけている^⑦。そこからは、この当時、アトスの領域内で近隣の牧畜民が自分たちの家畜を放

牧させ、それが隠修士たちの瞑想生活を妨げていた様子が読み取れるのである。

こうした状況の下で、アトス山の隠修士たちも、領域外の他の修道院や一般住民との紛争に対処するため、彼ら自身、団結し、ひとつの共同体を結成して、統一的な行動が採れるような態勢を整える必要があると認識したようである。九〇八年には、近隣のコロボス修道院との紛争を解決するために、プロトス・ヘシカステス（静寂主義者＝隠修士の長）という肩書きを帯びたアンドレアスなる人物が、アトス山を代表して、コンスタンティノープルに派遣されている⁽²⁶⁾。この出来事は、その後のアトス山の修道院共同体の首長職であるプロトスという称号の初出例として、注目されている。

その後、十世紀半ば頃までに、アトス山は、共同体の首長であるプロトスと、修道院長たちで構成される評議会によって運営される自治組織を整えていったようである。

一方、九世紀後半に初めて公的にアトス山保護の姿勢を示したバシレイオス一世以来、十世紀の半ばに至るまで、歴代のビザンツ皇帝は、こうしたアトス山の修道自治組織をひとつのまとまりとして保護を与え、特権を授与する政策を採ってきた⁽²⁷⁾。

ところが、そうした状況は、十世紀後半に、以後のアトスの隆盛の立役者となる聖アタナシオスが、この地に到着したのを機に、大きく変わることになる。

十世紀の前半に小アジアの黒海沿岸の都市トレビゾンドで生まれたアタナシオスは、アトスに移り住む以前には、小アジア西部、ビテュニア地方のキュミナス修道院で修道生活を送っていた。彼の師ミカエル・マレイノスは、小アジアの有力な軍事貴族家門の出身であり、その甥が、クレタ再征服の英雄で、後に皇帝になるニケフォロス・フォールカスであった⁽²⁸⁾。

こうした関係から、アタナシオスは、ニケフォロス・フォールカスと親交を結び、後者の信仰生活上の助言者の役割を演じることになった。

九六三年、アトス山に渡ったアタナシオスは、フォールカの全面的な支援を受けて、自らの修道院の建設に着手した。これが、今日に至るまでアトス山で最大、かつ山内の修道院のうちで筆頭の席次を誇る大ラウラ修道院なのである。

この出来事は、アトス山の歴史を画する重大な転換点となった。

ラウラの成立を機に、アトス山における修道士たちの生

活形態は、それまでの隠修士たちの孤住生活から、大規模な修道院での共住生活へと、大きく構造的に転換してゆくことになった²⁹⁾。また、英国の研究者ローズマリー・モリスが指摘するところによれば、それまではアトス山全体を対象にして施されてきた皇帝からの恩典や特権が、アナシオスによるラウラ創建以後は、皇帝と特別な関係を有する特定の修道院を対象として、個別的に授与される傾向が強まるようになるのである³⁰⁾。

聖アナシオスの名声は、帝国全土、あるいはビザンツの版図を越えて地中海の周辺にまで及んだという。各地から、彼の徳を慕って、修道士たちがアトス山に参集した。今日、アトス山修道院共同体のなかで、大ラウラに次ぐ權威を誇るイヴィロンやヴァトペディといった大修道院が建設されたのも、この時期、彼の影響下においてであった。

『聖アナシオス伝』の作家は、「ローマ自体、イタリア、カラブリア、アマルフィ、イベリア、アルメニア」から、この聖者の下に人々が集まってきた、と伝えている³¹⁾。

さて、ここでようやく、我々は、アマルフィ人たちがアトス山を訪ねるところにまで辿り着くことになった。彼らは、この時期、聖アナシオスの主導の下で、新たな発展の時代を迎えていたアトス山の修道生活に引き付けられて、

その地に集まった異邦人たちの集団の中にいたのである。

この時期、相次いでアトス山に創建された非ギリシア系の修道院に関して、ギリシアの研究者D・ナスターセは、当時の国際政治との関連性を強調し、それらの建設は、それらの母国がビザンツとの政治的紐帯を強化するための方策なのだと結論付けている³²⁾。

世俗生活からの脱却を旨とするアトス山の修道制においても、聖アナシオスとニケフォロス・フォカス帝との密接な連携関係に象徴されるごとく、政治の影が色濃く漂っていたのは事実である。しかし、だからといって、修道士たちの自発的な行動に起因する修道院建設事業を、彼らの母国の政治的な打算という即物的な理由だけで説明しようとするナスターセの手法は、どう見ても強引であり、物を事過度に単純化した稚拙な議論と言わざるを得ない。以下では、そうした皮相的な理解にとらわれることなく、現存する史料をたどりながら、アトス山におけるアマルフィ人修道院の成立と発展の過程の再構成を試みることにしよう。

五 アマルフィ人修道院の成立と発展

通説によれば、アトス山のアマルフィ人修道院の歴史は、

ベネヴェント侯バンドウルフォ二世の兄弟で修道士のレオが、六人の弟子を伴って当地に現れたときに始まった⁵⁹。

彼らは、当初、同じ異邦人のよしみで、イヴィロン修道院の創設者「イベリア人」ヨハネスの許に身を寄せた。ちなみに、「イベリア」とは、今日のグルジアのことであり、「イヴィロン」とは、「イベリア人たちの」（複数属格形）という意味である⁶⁰。

やがて、レオは、イヴィロン修道院の支援を受け、自身の修道院建設に取りかかった⁶¹。それが、今日、アトス半島の東岸、イヴィロンと大ラウラのほぼ中間の地点に遺構が残る、アマルフィ人の修道院であった、と考えられる。

なお、先にも触れたナスターセは、ベネヴェント人レオが創建した修道院と、いわゆるアマルフィ人の修道院は別の存在であると主張している⁶²。しかし、レオの修道院は、十一世紀半ばまで存在していた唯一の「ローマ系」修道院であるという聖者伝作家ゲオルギオス・ハギオリテスの証言と、同じ時期に史料的に存在が確認できるラテン系修道院は、アマルフィ人のそれだけである、という事実を根拠に、通説どおり両者を同一の存在と考える『イヴィロン文書』編者の見解をここでは踏襲しておきたい⁶³。

九八四年と九八五年に発給された二つの文書には、署名

者のなかに、ラテン文字で署名したヨハネスとアルセニオスという二人の修道士が登場する⁶⁴。このうちヨハネスは、九九一年にプロートス、ヨハネスが発給した文書に、「ヨハネス、修道士、修道院長」と署名している人物⁶⁵と同一と思われ、この時期までに彼は、レオに代わって二代目の修道院長の地位に就いていたものと想定される。

彼は、おそらく、ペルトウシが考えるように、レオに従ってアトスにやってきた六人の弟子たちのうちのひとりだったのだろう⁶⁶。このヨハネスは、その後、一〇一二年と一〇一六年の文書の署名者のうち、それぞれ五番目と六番目の席次で姿を見せた後⁶⁷、一〇一七年のプロートス、ニケフォロスの発給文書では、二番目、すなわちプロートスのすぐ後、という高い席次で登場している⁶⁸。おそらく、このときまでにヨハネスは大変な高齢に達しており、修道院共同体の最長老格としての威厳が、彼にこうした高い席次をもたらしたのだろう⁶⁹。

次に、一〇三五年のプロートス、テオクテイストスの発給文書には、署名者の四番目に、「ヨハネス、アマルフィ人の卑しき修道士」という署名が登場する⁷⁰。この人物を二代目の修道院長と同一人物と考えるのは、年代的に無理があるように思われるので、ここでは同名の別人物である

と考えておくことにしたい。

一〇四五年、皇帝コンスタンティノス九世モノマコス（在位一〇四二—一〇五五）は、アマルフィ人の修道院に対して、コンスタンティノープルで必要な物資を調達できるよう、一隻の大型船を所有する許可を与えた⁴³。前にも述べたように、コンスタンティノープルにはアマルフィ人独自の居留地があつたから、彼らはそこで、生活物資を入手しようとしたのだらう。

皇帝はなお、その際に、修道院が所有する船を商業目的で利用することを禁じる旨も通達している。この点については、イギリスの研究者アラン・ハーベイが、「どれほど厳密に彼らがこの条項を守ったかは、もちろん、不明である」とコメントしていることを付け加えておきたい⁴⁴。

いずれにしても、こうしたコンスタンティノス・モノマコス帝の布告から、アトス山のアマルフィ人修道院の修道士たちが、自前の船を操り、コンスタンティノープルの彼らの同胞の居留地との間を活発に往来していたことが偲ばれるのである。

ちょうどこの時期は、コンスタンティノープルに屋敷を構え、母国アマルフィの大聖堂を初め、ローマの聖パオロ・フォーリ・レ・ムーラ聖堂、モンテ・ガルガーノの聖ミ

ケレ聖堂などにコンスタンティノープルで製造されたブルンズ製の大扉を寄進し、アンティオキアとイエルサレムに自国民や西欧からの巡礼者たちのための慈善施設を建設した大富豪マウロとパンタレオーネの父子の下で、アマルフィ人が最後の華々しい活躍を展開した時代とも一致している⁴⁵。いわば、この時期、アトス山のアマルフィ人修道院は、繁栄するビザンツ帝都の同胞たちの居留地と二人三脚で発展を遂げていたのである。

彼らがコンスタンティノープルと密接な関係を保ち、しかも豊かな資金力を誇っていたことは、一〇八一年に、彼らが、首都のコスミディオ修道院から、マケドニア地方ストリュモン川東部の地所を金二四リトラという大金で購入している、という事実からも確認できるだらう⁴⁶。

同じ一〇八一年、皇帝アレクシオス一世コムネノス（在位一〇八一—一〇八八）は、アマルフィ人修道院に対して黄金印璽文書を交付し、彼らが獲得した所領の所有権と、それに付随した免税特権を確認した⁴⁷。これらの文書で注目されるのは、アマルフィ人の修道院が「帝国修道院^{パシリケ・モノアキ}」であると明言されている点である⁴⁸。同修道院の威勢が偲ばれるであらう。この時期、皇帝の手厚い保護を受けたアマルフィ人修道院は、その勢威の絶頂に達していた、と言え

るのかも知れない。

だが、絶頂の時は、同時に没落が始まる時でもあった。すでに一〇七三年、彼らの母国アマルフイは、ノルマン人の軍門に降り、政治的独立を喪失していた。南イタリアを制圧したノルマン人の首領ロベール・ギスカルは、その後、ビザンツ本土の征服を目論み、一〇八一年春には、軍勢を率いてバルカン西部に侵攻する⁵⁰。今やここにおいて、アマルフイ人は、ビザンツの敵对国家の臣民という境遇に陥ることになったのである。

一〇八二年五月、皇帝アレクシオス一世は、このノルマン人との戦いで、艦隊を出してビザンツに協力したヴェネツィア人の労に報いるために、黄金印璽文書を交付し、彼らに多くの通商上の特権を授けた⁵¹。そして、それらの特権の一項目には、帝都と帝国内に店舗をもつアマルフイ人は年三ノミスマタをヴェネツィアの聖マルコ聖堂に納めるべきこと、という条項も含まれていた。これは、帝国内のアマルフイ人商人を、長年のライヴァルであるヴェネツィア人への貢納者の地位へと貶める措置として解釈することができるのである。

その後もアマルフイ人の修道院は、一一〇八年、さらには一一六九年の文書において、いずれも修道院長が、署名

者の中で五番目の席次で登場する⁵²など、表面的にはそれまでの格式を維持していたように思われる。ちなみに、この一一六九年の文書において、我々は初めて、「アマルフイ人の聖マリア」というこの修道院の正式名称を目にすることになる。しかし、この間にも、水面下では、修道院の没落は、静かに進行していたようだ。この修道院の活動を伝える記録は、一一九八年のヒランダル修道院文書⁵³を最後にして、途絶するのである。

六 アマルフイ人修道院の終焉

我々が、再びアトス山のアマルフイ人修道院を目にするのは、一二八七年、それが完全に荒廃し、廃墟と化した後のことであつた。

この年、プロートスのヨハネスは、大ラウラ修道院の求めに応じ、アマルフイ人修道院の施設を再建し、それを維持することを条件に、同修道院とそれに付随する全ての資産を、大ラウラに引き渡すことを決定した。この決定は、皇帝アンドロニコス二世パラエオロゴス（在位一二八二—一二八八）とコンスタンティノーブル総主教グレゴリオス二世によっても裁可された⁵⁴。かくして、ここにアトス山のアマルフイ人修道院は、十世紀の後半以来、およそ三百

年に及んだ歴史を完全に閉じることになったのである。

イタリアの研究者アゴステイノ・ペルトウシは、アマルフイ人修道院没落に至る要因を次のように列挙している⁶⁸⁾。

第一に、新たなイタリア人修道士を補充できないことに起因する人的資源の枯渇。そして、母国アマルフイの政治的没落と、一一三七年のその決定的な滅亡。第三に、東西教会の宗教的対立と教会分裂。第四は、海運都市国家間の政治的、通商的な抗争。ここで、彼の念頭にあるのは、ヴェネツィア人との競合関係と、そこでのアマルフイ人の敗退である。そして五番目に、最後のとどめになったのが、皇帝アンドロニコス二世の反ローマ、反教会合同政策だった、というわけである。

かつて東方正教会の聖山アトスのただなかに、ベネディクトゥス派のアマルフイ人修道院が、修道院共同体の正規の構成員として存在したことが、東西教会の相互理解と共存関係を象徴していた、と言えるとするれば、そうしたことが不可能になった十三世紀末の情勢は、今日に至るまで続く東西教会の分裂が決定的になっていった時期であった、と言えるだろう。今日も、アトス山の東海岸にその姿を留める、アマルフイ人修道院の塔の遺構は、かつての短い栄光

の時代を、いまなお、我々に伝えてくれているのである。

註

- (1) アトス山修道院共同体に関しては、Th. M. Veremis & M. Dragounis, *Historical Dictionary of Greece*, Melutchen, N. J., London, 1995 の該当項目、Mount Athos (Holy Community of), pp. 128-130 を参照。邦語では、高橋繁一・辻成史「聖山アトス」講談社・世界の聖域 第十三巻、一九八一年、がある。また、D・メダゴウィチ、B・J・ジュリッチ、D・ボグダノウィチ著、田中一生、鐸木道剛訳「ヒランダル修道院」、恒文社、一九九五年、二二―三〇頁に、簡潔で要を得た解説が得られる。アトス山訪問記としては、益田朋幸「地中海紀行 ビザンティンでいこう」、東京書籍、一九九六年、それに「橋大学地中海研究会」『地中海という広場』、淡交社、一九九八年（渡辺金一、松木栄三両氏による二編の旅行記を収録）が興味深い。他に、一般向きなものでは、川又一英『聖山アトス——ビザンチンの誘惑』、新潮選書、一九八九年や、那谷敏郎『ビザンチンの光芒——聖域行』、平凡社カラー新書、一九七六年、などがある。

- (2) cf. D. Rousseau, 'L'ancien monastère bénédictin du Mont Athos', *Revue liturgique et monastique*, 14, 1929, pp. 530-

- 547(舊邦米記); L. Bonsall, "The Benedictin Monastery of St Mary on Mount Athos", *Eastern Church Review* 2, 1969, pp. 262-267; P. Lemerle, "Les archives du monastere des Amalfitains au Mont Athos", *Epistelis Hetaireias Byzantinon Spoudon*, 23, 1953, pp. 548-566; A. Pertusi, "Monasteri e monaci italiani all'Athos nell'alto medioevo", dans *Le millenaire du Mont Athos 963-1963*, 2 vols. Chevetogne, 1963-1964, t. I, pp. 217-251.
- (3) 我が国ではほとんど知られていないこの主題を取り上げるにあたり、本稿では、欧米の先行研究に拠りつつ、それらを筆者なりの仕方で整理、再構成した、という以上のことはなされていない。また、南イタリア関係の情報は、多く二次文献に負っているのも、遺憾な点と言えよう。
- (4) 陣内秀信『南イタリアへ——地中海都市と文化の旅——』、講談社現代新書、一九九九年、特に二六七—二八三頁。
- (5) この都市国家の歴史については E. Schwartz, *Amalfi im frühen Mittelalter* (9.-11. Jahrhundert), Tübingen, 1978, S. 13-68; M. Balard, "Amalfi et Byzance (X-XI^e siècles)", *Traux et Mémoires*, 6, 1976, pp. 87-95 を参照。
- (6) ヴェネツィア共和国の初期の歴史については、やはりあたり D. M. Nicol, *Byzantium and Venice: A Study in Diplomatic and Cultural Relations*, Cambridge, 1988, pp. 1-67 を参照。
- (7) cf. A. O. Citarella, "The Relations of Amalfi with the Arab World Before the Crusades", *Speculum* 42, 1967, pp. 299-312; C. Cahen, "Un texte peu connu relatif au commerce oriental d'Amalfi au X^e siècle", *Archivio Storico per la Province Napoletane*, 34, 1953-54, pp. 3-8.
- (8) A. O. Citarella, "Pattern in Medieval Trade: The Commerce of Amalfi Before the Crusades", *The Journal of Economic History*, 28, 1968, pp. 531-555.
- (9) *Quellen zur Geschichte der sächsischen Kaiserzeit*, Hrsg. A. Bauer und R. Rau, Darmstadt, 1977 (1992), S. 468-469; (英訳) F. A. Wright, *The Works of Liudprand of Cremona*, London, 1930, p. 191.
- (10) *Quellen zur Geschichte*, S. 564-565; Liudprand of Cremona, *Relatio de Legatione Constantinopolitana*, Edited and translated by B. Scott, Bristol, 1993, p. 17, 46; F. A. Wright, *The Works of Liudprand*, p. 262.
- (11) cf. A. Hofmeister, "Der Übersetzer Johannes und das Geschlecht Comitiss Mauronis in Amalfi. Ein Beitrag zur Geschichte der byzantinisch-abendländischen Beziehungen besonders im 11. Jahrhundert", *Historische*

- Vierteiljahrsschrift*, 27, 1937, S. 225-284, S. 263; M. Balard, "Amalfi et Byzance", p. 87.
- (12) cf. R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin. 1: Le siège de Constantinople et le patriarcat oecuménique*, 3: *Les églises et les monastères*, 2ed., Paris, 1969, p. 570f.
- (13) 一〇八二年五月のアレクシオス一世コムネノス帝のヴェネツィア人宛ての黄金印璽文書(註52を参照)から、この事実が確認できる。
- (14) cf. H. Bloch, "Monte Cassino, Byzantium and the West in the Earlier Middle Ages", *Dumbarton Oaks Papers*, 3, 1946, pp. 165-224, esp. pp. 168-173; G. Loud, "Montecassino and Byzantium in the Tenth and Eleventh Centuries", in M. Mullett & A. Kirby ed., *The Theotokos Evergetis and Eleventh-Century Monasticism*, Belfast, 1994, pp. 30-55, esp. pp. 32-37; V. von Falkenhausen, *Untersuchungen über die byzantinische Herrschaft in Süditalien vom 9. bis ins 11. Jahrhundert*, Wiesbaden, 1967, S. 162-177, 184.
- (15) cf. G. A. Loud, "Byzantine Italy and Normans", in J. D. Howard-Johnston ed., *Byzantium and the West, c. 850-c. 1200*, Amsterdam, 1988, pp. 215-233.
- (16) O. Rousseau, "La visite de Nil de Rossano au Mont-Cassin", *Italia Sacra*, 22, 1972, pp. 1111-1137; G. Loud, "Montecassino and Byzantium", pp. 38-41; A. Pertusi, "Monasteri e monaci italiani", p. 225f.
- (17) H. Bloch, "Monte Cassino, Byzantium and the West", p. 187f.; G. Loud, "Montecassino and Byzantium", p. 43f.
- (18) H. Bloch, "Monte Cassino, Byzantium and the West", pp. 193-222. その一方で、G・ルードは、ビザンツの文物を西欧に流布せしめる上、モンテ・カッシーノが果たした役割を過大評価しているようにも見える。 cf. G. Loud, "Montecassino and Byzantium", pp. 50-55.
- (19) A. Pertusi, "Monasteri e monaci italiani", p. 223f.
- (20) cf. R. Janin, *Les églises et les monastères des grands centres byzantins*, Paris, 1975, pp. 127-191, 216-250.
- (21) D・メタコウイチ、B・J・シネーリッチ、D・ボグダノヴィチ著『ユビナール修道院』(三三―四頁) 那谷敏郎『ユビナールの光輝』(一一―一三頁)
- (22) *Notes du Protaton*, ed. D. Papachryssanthou, Paris, 1975, p. 7.
- (23) *ibid.*, pp. 7-14.
- (24) *ibid.*, pp. 17-41; R. Morris, *Monks and Laymen in Byzantium, 843-1118*, Cambridge, 1995, p. 43f.

- (25) *Actes du Protaton*, no. 1, pp. 177-181.
- (26) *ibid.*, no. 2, p. 184 (*l. 17-18*).
- (27) 皇帝レオン六世(在位八八六〜九一一)の文書「およびロマノス一世レカペノス(在位九二〇〜九四四)の黄金印璽文書を参照」*ibid.*, no. 2, 3, pp. 181-187.
- (28) cf. A. E. Laiou, "The General and the Saint: Michael Maleinos and Nikephoros Phokas", in *F.T.H. Melanges offerts à H. Ahreveler*, Paris, 1998, pp. 399-412. "カエサル・クレイノスの生家であるクレイノス家については「やはり」抽稿「十世紀小アジア貴族の世界」, 「古代文化」四一巻「号」一九八九年「二二一三七頁」特に二五〜三三頁を参照のこと。
- (29) cf. J. Leroy, "La conversion de saint Athanase l'Athonite à l'idéal cénobitique et l'influence studite", dans *Le millénaire du Mont Athos 963-1963*, 2 vols, Chevetogne, 1963-1964, t. 1, pp. 101-120; R. Morris, *Monks and laymen*, pp. 44-46.
- (30) R. Morris, "The Origin of Athos", in A. Bryer & M. Cunningham ed., *Mount Athos & Byzantine Monasticism*, Aldershot, 1996, pp. 37-46, esp. p. 45.
- (31) *Vitae duae antiquae Sancti Athanasii Athonitae*, ed. J. Norel, Turnhout, 1982, p. 74.
- (32) D. Nastase, "Les débuts de la communauté oecuménique de Mont Athos", *Symmeikta*, 6, 1985, 251-314.
- (33) ベネヴェント出身のレオと弟子たちのアトス山来訪と定着についての挿話は、イヴァイロン修道院の創建者ヨハネスとエウテモシオスの伝記作品に収められている。本稿では「ゲルジア語の原文ではなく」上記の仏訳を利用した。B. Martin-Hisard, "La Vie de Jean et Euthyme et le statut du Monastère des Ibères sur l'Athos", *Revue des Études byzantines*, 49, 1991, pp. 67-142. 参照箇所は「p. 109f.」
- (34) アトス山のイヴァイロン修道院については「上記」G. B. Martin-Hisardの論文に加えて「J. Lefort et D. Papachrysanthou, "Les premiers géorgiens à l'Athos dans les documents byzantins", *Bede kartlisa*, 41, 1983, pp. 27-33や参照」
- (35) B. Martin-Hisard, "La Vie de Jean et Euthyme", p. 109; A. Pertusi, "Monasteri e monaci italiani", pp. 220-225.
- (36) D. Nastase, "Lanthanousa athonitike mone tou 10ou aiona", *Symmeikta*, 5, 1983, pp. 287-293.
- (37) *Actes d'Iviron. I: Des origines au milieu du XI^e siècle*, éd. J. Lefort, N. Oikonomides, D. Papachrysanthou et H.

- Métréveli, Paris, 1985, p. 36, 137.
- (38) *ibid.*, no. 6, 7, p. 137f, 140, 151.
- (39) *Actes de Larva, I: Des origines à 1204*, éd. P. Lemerle, A. Guillou, N. Svoronos et D. Papachryssanthou, Paris, 1970, no. 9, p. 120, 122.
- (40) A. Pertusi, "Monasteri e monaci italiani", p. 224.
- (41) *Actes de Larva, I*, no. 17, p. 145, 148, no. 19, p. 155.
- (42) *ibid.*, no. 21, p. 164f.
- (43) cf. P. Lemerle, "Les archives du monastère des Amalfitains", p. 551.
- (44) *Actes de Larva, I*, no. 29, p. 186.
- (45) *Actes du Protaton*, no. 8, p. 228.
- (46) A. Harvey, *Economic Expansion in the Byzantine Empire, 900-1200*, Cambridge, 1989, p. 239. 以下「トース山修道院」の商業活動について M. Zivoinovic, "The Trade of Mt Athos Monasteries", *Zbornik radova Iizantoloskog Instituta*, 29-30, 1991, pp. 101-116 を参照。
- (47) 「トルコ族の跋扈」について A. Hofmeister, "Der Übersetzer Johannes und das Geschlecht Comitiss Mauronis", S. 239-284, W. Heyd, *Histoire du commerce du Levant au Moyen Age*, Leipzig, 2 vols, 1885-86 (rep. Amsterdam, 1967), vol. I, pp. 100-106 を参照。コンタレオーネがイタリア各地の聖堂に寄進したコンスタンティノール製の青銅扉については M. E. Frazier, "Church Doors and the Gates of Paradise: Byzantine Bronze Doors in Italy", *Dumbarton Oaks Papers*, 27, 1973, pp. 145-162 を見よ。
- (48) *Actes de Larva, I*, no. 42, pp. 229-236.
- (49) *ibid.*, no. 43, pp. 236-240.
- (50) *ibid.*, no. 42, I, & *II*, 22-23, 61, pp. 233-235; no. 43, I, 17, 55, p. 239f; L. Bonsall, "The Benedictine Monastery of St Mary", p. 266.
- (51) ノルメン人による南イタリア制圧とそれに続くビザンツ領侵攻の顛末については、邦語では「山辺規子『ノルメン騎士の地中海興亡』」、白水社「一九九六年」が詳しい。
- (52) G. L. F. Tafel und G. M. Thomas, *Urkunden zur alten Handels- und Staatsgeschichte der Republik Venedig*, 4 vols, Wien, 1856-1857, vol. I, S. 51-54; F. Dölger und P. Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reichs*, vol. I, 2 Aufl., München, 1995, no. 1081, S. 93-95.
- (53) *Actes de Larva, I*, no. 57, p. 269; *Actes de Saint-Pantélémon*, éd. P. Lemerle, G. Dagron et S. Cirhovic, Paris, 1982, no. 8, p. 84.

- (54) *Actes de Chilandari. I. Des origines à 1319*, ed. M. Zivojinovic, Ch. Girois et V. Karavari, Paris, 1998, no. 3.
- (55) *Actes de Lavra. II: De 1204 à 1328*, éd. P. Lemerle, A. Guillou, N. Svoronos et D. Papachryssanthou, Paris, 1977, no. 80, 81, pp. 51-54.
- (56) A. Pertusi, "Monasteri e monaci italiani", p. 230.

〔追記〕本稿は、一九九九年十二月二十八日に金沢市立玉川図書館で開催された第四一回北陸史学会大会における口頭発表原稿に基づいて作成された。

（金沢市天神町二一七一）